

平成27年度研究成果報告書《平成26年度指定教育課程研究指定校事業》

都道府県・ 指定都市番号	63	都道府県・ 指定都市名	岡山市	研究課題番号・校種名	3(4)小学校
				領域名	E S D
研究課題	<p>新学習指導要領の実施を踏まえた、学校全体での教育課程の編成、指導方法等の工夫改善に関する実践研究</p> <p>(4) E S Dを学校全体で体系的に推進するために、各教科等の連携により、持続可能な社会づくりに関わる課題を見いだし、それらを解決するために必要な能力や態度を児童生徒に身に付けさせるための教育課程の編成、指導方法等の工夫改善に関する実践研究</p>				
ふりがな 学校名 (児童・生徒数)	おかやまけんおかやましりつさんくんしょうがっこう 岡山県岡山市立三勲小学校 (553人)				
所在地 (電話番号)	岡山県岡山市中区徳吉町一丁目1-21 (086-272-3141)				
研究内容等掲載ウェブサイト URL	http://www.city-okayama.ed.jp/~sankuns/				
研究のキーワード	価値観 伝統文化 能力・態度 つながり 責任性				
研究成果のポイント	<p>○持続可能な開発・発展を尊重する価値観の育成</p> <p>○持続可能にするための能力・態度の伸長</p> <p>○E S Dカレンダーの作成による「育てたい力と価値観のつながり」の明確化</p>				

1 研究主題等

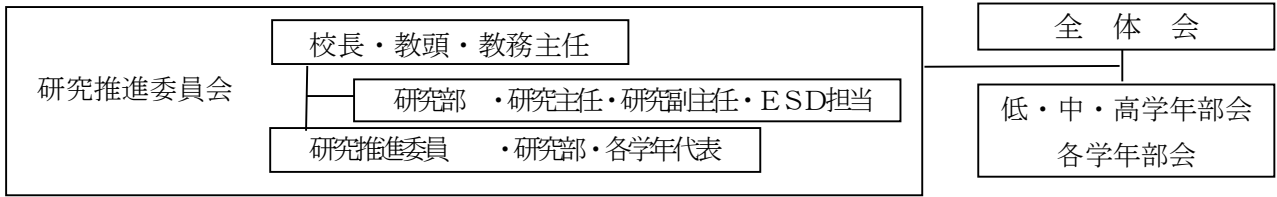
(1) 研究主題

「持続可能な社会づくりに向けて主体的に取り組み、ともに育ち合う児童の育成」
～郷土の文化と日本の伝統文化に着目した授業の創造～

(2) 研究主題設定の理由

本校では、人・自然・文化を題材として取り上げて学ぶ「ふるさと学習」を、生活科や総合的な学習の時間を中心に進めている。第6学年児童は、日本の伝統文化である能楽を体験的に学び、秋には学区に隣接する岡山後楽園の能舞台で発表会を行っている。この学習は、「ふるさと学習」の集大成として、地域や文化財を守る意識を高め、伝統文化を継承する担い手を育てるよい機会となっている。本研究では、E S Dとしての小学校段階の到達点を見すえて、地域や伝統文化に関する学習内容を整理し、生活科や総合的な学習の時間とその他の教科との関連を図る教育課程の編成を目指している。児童が身に付けた態度・能力を発揮しながら、自ら課題を見付け、協働して解決していく学習を積み重ねることが、持続可能な社会づくりに求められる価値観と実践力を育てることにつながると考えるからである。将来の社会の形成者として、身近な地域の在り方に関心を持ち続け、我が国の伝統文化を尊重する児童を育てるとともに、さらに国際的視野をもって異なる伝統文化を持つ他者と協調していく児童の姿を目指したいと考える。

(3) 研究体制



(4) 2年間の主な取組

平成26年度	<ul style="list-style-type: none"> ○研究主題と研究内容についての共通理解・実態調査 <ul style="list-style-type: none"> ・講義「ESD, ESDの視点に立った学習指導」(岡山大学教授 住野好久先生) ・地域や伝統文化に関わる単元一覧表の作成 ・ESDや「ふるさと学習」に関わる児童の意識調査の実施 ○研究授業(第4学年総合的な学習の時間)「『ふるさと三勲』をつくろう」, 担当調査官による指導 ○後楽園能舞台での能学習の発表(第6学年児童) ○研究授業(第1学年生活科, 第2学年生活科, 第3学年総合的な学習の時間, 第5学年総合的な学習の時間) ○研究授業(第6学年社会科)「文化で歴史をふり返ろう」, 担当調査官による指導 ○ESDや「ふるさと学習」に関わる意識調査の実施・分析, 2年次の研究計画の検討
平成27年度	<ul style="list-style-type: none"> ○前年度に設定した児童に育てたい「価値観と4つの力」の設定・見直し <ul style="list-style-type: none"> ・講義「これからのESDに求められるもの」(岡山大学教授 川田力先生) ・ESDや「ふるさと学習」に関わる児童の意識調査の実施・分析(前年度との比較) ○研究授業(第2学年生活科)「町をたんけん 大はっけん!」, 外部講師による指導 ○地域や伝統文化を取り上げたESDカレンダーの作成・修正 <ul style="list-style-type: none"> ・各単元の学習内容と価値観や4つの力との関連の洗い出し ○研究授業(第4学年道徳)「みんなかがやこう」, 担当調査官による指導 ○後楽園能舞台での能学習の発表(第6学年児童) ○研究発表会(第1学年生活科, 第3学年道徳, 第5学年総合的な学習の時間, 第6学年社会科)授業公開, 協議会, 記念講演(担当調査官) ○意識調査の実施・分析(2カ年の評価), ESDリーフレットとまとめ冊子の作成 ○次年度の指導計画づくり

2 研究内容及び具体的な研究活動

(1) 研究内容

伝統文化を中心としたESDを進めるに当たり, 特に次の二点の具体化を図る。

○持続可能な開発・発展を尊重する価値観の育成

児童が地域のよさや我が国の伝統文化の素晴らしさや大切さを実感し, 周りと共有できる価値観を育てることをねらいとする。そのために, 各教科等の学習内容を踏まえ, 地域や伝統文化に即したものを洗い出し, 児童の発達段階も考慮して, 持続可能な社会の構成概念として従来より例示されていたもののうち, 多様性・相互性・連携性・責任性の四つに重点を置いて教育課程を編成し, 指導していくこととする。

○持続可能にするための能力・態度の伸長

前年度末に見直した四つの力(①事象のよさや問題点を多面的・総合的・批判的に考える力,

②地域のよさや、伝統・文化の値打ちを捉える力、③他者と進んで関わる力、④地域や伝統・文化と自分とのつながりを見出し、働きかける力)を各単元の指導計画に位置付け、発揮させる指導方法の工夫を行う。

(2) 具体的な研究活動

価値観と能力・態度は、設定した中からそれぞれ一つずつに重点を置いて単元構想や授業展開するものとし、児童に培うことができたかを評価しやすくして、実践研究を進める。各学年で培う価値観と能力・態度、及び各教科等の関連を、ESDカレンダーに整理することにより、学習内容や発達段階に即して、関連的・系統的な指導を行えるようにする。

○持続可能な開発・発展を尊重する価値観の育成への取組

第2学年生活科では、学校周辺を探検した児童が各所で特徴的な物や、地域の方々の存在に気付き、自分たちとのつながりに意識を向けており、多様性や相互性を実感している。第3学年総合的な学習の時間では、児童が学区内に数多く見られる史跡や文化財を巡る活動を繰り返して、保存・継承してきた地域の人々の働きがあったからこそ残っているという共通点を明らかにしている。活動のふり返りとして、「地域の宝をまた探してみたい」「自分たちも大事にしていきたい」などの記述が見られ、相互性を実感して連携性へと意識を向けていると考える。このように、地域や伝統文化に関する学習を中心に、学習対象を理解した上で、対象が持つ素晴らしさや大切さに目を向けられる感性(価値観)を育てることを意図して実践している。

能楽の発表会までを終えた第6学年児童は、能楽特有の洗練された動きや凛とした雰囲気、先人の思いなどに触れ、素晴らしさや大切さを感じ取っている。また、「能楽を通して、役割や責任を果たす意義や、団結する大切さなども学んだ」とふり返っている。内容・方法の両面から伝統文化を学んだことにより、児童は「貴重な体験をした自分たちだからこそ、受け継いでいきたい」「親しみを持つことや広めていくことも受け継ぐことになる」などの意識(責任性)を持っている。

○持続可能にするための能力・態度の伸長への取組

特別支援学級の和太鼓の活動では、上学年児童が下学年児童に対して心優しい言葉かけや関わり方ができており、下学年児童も助言を素直に受け入れ、意欲的に取り組もうとしている。同様に、第1学年生活科の昔遊び体験では、地域の高齢者に教わり、友達と教え合う活動を経て、次は自分たちが幼稚園児に教える活動を行うことにより、他者と関わる力を発揮する児童が多く見られている。これらは、伝統文化に関わる題材や活動の吟味や、活動する場づくりなどの手立ての工夫によるものと考えている。

3 研究の成果と課題

(1) 成果

○伝統文化を取り上げたESD

本校児童は地域の特色や史跡・文化財、能楽といった伝統文化を学習対象とすることにより、自分との関わりやつながりを見出し、社会との関係性を学んでいる。伝統文化を大切にしながら、自分の拠り所を明らかにするとともに、集団や社会に所属する喜びを実感することにもつながっていると考える。これは、ESDで目指す、人間性や関係性を捉えて社会を形成する担い手となり得る姿であると考えている。

○価値観の育成

各単元において学習内容に含まれる価値観を想定することにより、どの授業においてもESDとして培いたいものを見通した指導ができるようになってきた。また、地域の特色や伝統文化を

取り上げる学習において、児童が、それらのよさや値打ちに触れ、新たな考えを持ったり、関わり方を考えたりしやすくなっている。児童の意識調査を見ると、「自分と物事とのつながりを感じる」が、研究を開始した当初と比較して全体で15ポイント増加した。また、多様性・相互性・連携性・責任性のいずれかに重点を置いた指導を行うことにより、学年相応に培うべき価値観が明らかになってきている。低学年から中学年の段階にかけては多様性や相互性に、中学年から高学年の段階にかけては相互性や連携性に触れることが多くなっている。なお、責任性については、多様性・相互性・連携性を十分に踏まえた価値観の総体に当たるものと考えている。ESDで重視される「つながり」を、このような内容知として捉えることにより、児童の発言や記述などを見取って評価することが可能になりつつある。こうした児童に育まれた価値観を見取ることが、教育課程全体を評価することにもつながるものとする。

○能力・態度の伸長

低・中学年では、生活科や社会科、総合的な学習の時間で数多く校外に出かけ、人やもの、文化・歴史に触れている。高学年では、目的意識や見通しを明確にすることにより、課外での追求を促す、体験教室に参加するなどの姿が見られている。意識調査を見ると、「文化財や史跡を大切にしている」は、全体で10ポイント増加しており、活動の繰り返しや目的の焦点化を図ったことにより、体験の量と質が向上しているものとする。また、「自分の意見や行動によって周囲が変わる」が15ポイント、「他地域や外国の伝統文化を知りたい」が7ポイントいずれも増加している。問題解決的な学習過程の重視や、見通し・ふり返りの活動により、児童自身が学習の主体性や意義を感じ取ったものとする。ESDで重視される「関わり」を学習対象への主体的な働きかけや、共に学ぶ相手との相互の働きかけであると捉えると、こうした学習経験が社会に働きかける実践力につながったものとする。

(2) 課題

○評価方法の開発

設定した価値観と能力を各単元・授業レベルで具体化したものを評価規準とし、ESDとしての共通理解を図って指導することができている。反面、現在は児童の発言や記述が主であり、評価方法の開発が不十分である。児童の学ぶ姿をどのように見取るのか、評価のための活動を改めて設定するのではなく、単元間や学年間での児童の「育ち」を見取することを計画し、児童のふり返りの活動の在り方と合わせて検討する。それにより、価値観と四つの力の関連も明らかになると考える。

○音楽科・図画工作科・家庭科からの伝統文化教育への取組

伝統文化を対象としながら、音楽科・図画工作科・家庭科での実践が手薄となっている。音楽科・図画工作科では鑑賞活動から、家庭科では、食を視点にして我が国の伝統を捉える学習から始めるようにする。それらにより、「育てたい力と価値観のつながり」が一層明確になり、教育課程として充実したものになると考える。

○道徳授業の充実と各教科等との関連

設定した価値観には、情意的な面からの指導が不可欠であり、道徳授業の果たす役割は大きい。これについては今年度より取組を始めたところであり、今後はESDで求める価値観と道徳的価値との精査や、道徳授業と各教科等どのように関連させて指導するかを検討する。

(3) 指定期間終了後の取組

本研究の取組を市内の小中学校を中心に広く発信する。作成したESDカレンダーに沿って実践を積み、検討・修正を加えながら、毎年度更新していく。